『水滸伝』講義録の継承について

宮本陽佳

はじめに

長篇白話小説『水滸伝』が中国のみならず日本においても長く親しまれ、文学、言語等に大きな影響を与えてきたことは、すでに周知の通りである。近世中期頃より流行する唐話学習の教科書として利用され始めたが、後に多くの学者や著述家たちの興味を惹き、作品自体の研究が進められるようになる。特に享保から宝暦にかけては近世期において最も『水滸伝』研究が盛んな時期であり、各地で講読が行われていたと見られている。(1)

その一例として知られるのが、岡白駒（元禄五／一六九二―明和四／一七六七）による講義である。享保十二（一七二七）年の記載がある講義録を始め、各地にそれと見られる写本が残っている。『水滸伝』に関して白駒自身による著述はないが、彼の講義は近世期の『水滸伝』研究の中で最も早いものとして注目され、またその訳解のレベルの高さについても指摘されてきた。(2) 更に各地に残る講義録がその影響の大きさを示しているように思われるが、各講義録の成立やその関係について述べたものはほとんどない。

筆者はこれまで白駒の『水滸伝』講義について検討し、各地に残る講義録の調査を進めてきた。拙稿「『水滸伝訳解』にみる岡白駒の『水滸伝』研究―解釈の方法とその継承―」(3)「『水滸伝』講義の実態とその影響について―講義録を手がかりに―」(4) はその成果の一部を示し、講義録諸本を検討していく指標を模索したものである。各講義録の内容は、同じ講義を筆記したものと考えて概ね差支えないように思われるが、異なる箇所も散見され、中には同じ講義の記録としては些か不可解な点も認められる。

本稿では、すでに示してきた例を改めて紹介しながら、新たに確認したものを含めて再検討し、各講義録の継承について考察する。またその過程に見られる問題点等についても言及し、近世期の『水滸伝』研究が伝えられてきた経緯の一端を明らかにしたい。

一、白駒の講義について

まず白駒の『水滸伝』講義について、現在までに明らかになっていることを改めて確認しておく。

これまで白駒の講義の記録として主に取り上げられてきたのは、艮斎という人物が筆記したものである。『水滸伝』第一回から第百二十回までに見える語句を取り出して訓点や解説を付し、末に「水滸全傳巻廿四大尾　昉于享保丁未歳三月下旬訖于七月廿四日（筆者注：享保十二（一七二七）年三月下旬に始め七月二十四日に終わる）　岡龍洲口授　艮斎校正」と記している。使用テキスト、成立年、筆記者、講師が明記され、更に同年の跋も付いていることから、長澤規矩也氏が最も拠り所のあるものとして『唐話辞書類集』第十三集にその影印を収録している。[5] 今日、白駒の『水滸伝』解釈についての研究は主にこの影印によって進められており、本稿でもこれを基準として各講義録について検討していく。

筆記者の「艮斎」については、檜垣里美氏が摂津今津の加藤艮斎（貞享二／一六八五―宝暦四／一七五四）であろうと推測している。[6] 白駒の『水滸伝』講義の時期は、右に挙げた艮斎の記述によって知られるが、四ヶ月で百二十回分の講義を終えることは困難であるとして、これは開講の期間ではなく艮斎自身が講義録を整理した期間であろうという指摘もある。[7] また、開講の場所については明記されておらず、白駒と加藤艮斎の経歴から京都か大阪であろうと推測されるに留まる。[8]

この中に取り上げられている語句から、講義の底本は『水滸伝』百二十回本の中でも希少である古い系統のもの（毎回の標題等を「水滸全伝」としているもので、「全伝本」と呼ばれる。新しい系統のものは「水滸全書」としているため「全書本」と呼ぶ。）であると推測される。ただし、第十回から第十六回の途中までは百回本である四知館刊本を使用したと考えられ、別の回においても同本が参照されていたと見られる。その他、唐話学の第一人者であった岡嶋冠山（延宝二／一六七四―享保十三／一七二八）が編纂した唐話辞書等も参照されていたことが窺われる。[9] これ以外の講義録にも同様の状況を見ることが出来、同じ講義から派生していることが認められる。

しかし、講義を直接受講した人物が筆記したものばかりではないと思われる。次にこれまでに確認し得たものについて紹介し、その成立過程と継承関係を探っていきたい。

二、各講義録について

以下筆者が確認した十五部の講義録の所蔵（同じ機関が複数有している場合は請求番号も併せて示す。）等について示す。筆記者、成立時期についてはほとんどが不明であるが、印記等から知り得たことを示しておく。

①関西大学図書館長澤文庫蔵（請求番号：L23D6547、6548、6549）、三冊（上：第一回～十五回、中：第十六回～五十回、下：第五十一～百二十回）。外題『水滸全傳譯解』、内題『水滸傳譯解』。艮斎筆。享保十二年成立。印記：「蔦廼家文庫」「静盦蔵書」

一で述べたもの。先述の通り、この講義録には筆者と講師の名前が示されているが、現在までに確認した講義録のうち白駒の名前が記されるのはこれのみである。末に付された跋文から、艮斎は白駒の講義

を直接受講していたと推測される。次に全文を挙げる（傍線は私に付した）。

夫学問之道多端。自上古至六朝者四部之書乃備矣。能讀之有何難乎。而唐以来。有官府語。有俗語。加之。有轉借有諱避。有家語。故難皆理會之。唐以下書。文義難通暁者。為是故耳。吾邦学者往々置而不講。故雖老師宿儒誤文義尽為多也。且雖粗解隔靴掻痒而已。水滸傳者元之人羅貫中所著惣用俗。語所謂演義文者也。頃随于岡龍洲受文義。逐一附譯解。以備後来之遺忘云

（訳：学問は端緒が多く、上古から六朝に至るまでについては四部の書物が備わる。これを読むことに難しいことはない。しかし唐以来、官府の語や俗語があり、更に仮借や避諱、日常語が加わるため、これをすべて理解するのは難しい。唐以降の書物の文義を明らかにするのが難しいのは、このためである。我が国の学者は往々にしてこれらを放置し講じないため、老師宿儒であっても文義を誤ることは少なくない。また大まかに解釈は出来るものの、細かい部分がわからず歯痒いばかりである。水滸伝は元の人羅貫中が著したものであり、全て俗語を用いている。言葉は所謂演義文である。この頃岡龍洲に従って文義を受け、逐一訳解を付す。これをもって後の遺忘に備える。）

本稿ではこの艮斎筆記のものを講義を直接受講した人物が筆記した「原講義録」と位置づけ、他本を検討していく基準とする。ただし、注四所引の拙稿で指摘したように、第一回、第二回に艮斎が筆記した内容の中には、講義の本筋とは別の補講のようなものを記述した部分が見られる。他の講義録にはほとんど見られず、艮斎が独自に筆記したものである可能性も疑われる。

②大東急記念文庫蔵、二冊（上：第一回～四十回、下：第四十一～百二十回）。外題『水滸傳譯解』、内題『水滸傳譯解』。澤田重淵（元禄十四／一七〇一―天明二／一七八二）筆。江戸写[10]。印記：「東山高臥」「重淵」。

澤田重淵は京都の書肆風月堂の五代目主人、澤田一斎。名は重淵、字は文拱、号は一斎の他に奚疑斎を用い、風月堂主人の通称である風月庄（荘）左衛門を名乗った。柱に「奚疑斎」と刻された罫紙を用い、また名前の印があることから一斎筆記のものであると推測される。また、「東山高臥」も一斎の印であるという[11]。白駒に学んで白話に通じ、著書に短編白話小説集「三言二拍」中の五話に施訓した『小説粋言』（宝暦八／一七五七年風月堂刊）がある。

講義録中には、これを用いて一斎が『水滸伝』研究を進めたことを窺わせる書き込みが散見される[12]。

③東京大学文学部国語研究室蔵、二冊（第一回～四十回、第四十一回～百二十回）。外題『水滸傳解』、内題『南関先生水滸傳譯解』。一冊目の巻頭に明治十六年～明治二十二年の書入れがある。また二冊目の末に「水滸傳鈔譯」（第三十五～四十五回）、「再生記畧　巻上」が書

かれている。

内題の「南関先生」は後から書き加えられたと見られるが、これが誰を指しているのかは不明である。白駒と関係があり、「南関」の号を持つ人物としては、思想史家であった富永仲基（正徳五／一七一五―延享三／一七四六）が挙げられる。仲基、字は子仲また仲子、号は謙斎、南関、藍関。通称道明寺屋三郎兵衛を名乗った。仲基が白駒に宛てた書簡から二人には交流があったことが推測されている。書簡は「元礼」という人物を介する形で交誼を願う内容で、末に「浪華南関徳基再拝」とある。水田紀久夫氏はこれを享保末から元文初年、仲基二十歳前後、白駒が四十五歳前後のものと推測している[13]。

或は、『連城璧』『金瓶梅』の訳解を持つ岡南間喬（姓は岡、名は南、字は間喬。七介と称し、貴適斎と号した。生没年未詳[14]）の名前が誤伝されたものか。「南関先生」がどのような人物であったのかは、今後も追究を続けたい。

末に筆記される「水滸傳鈔譯」は、陶山南濤（元禄十三／一七〇〇―明和三／一七六六）による『水滸伝』講義の記録と見られるもので、『唐話辞書類集』に別本（第十六回～第百二十回）の影印が収録されている[15]。「再生記畧　巻上」は、清朝の雑著を収録した『昭代叢書』に見える、陳済生「再生記略」の前半部分とその本文が一致している[16]。ただし、表記が一部異なっており、また『昭代叢書』では「上」等と巻が分けられていないことから、別の単行本等を書き写したものと推測される。

別筆による書き込みが多く、大部分は明治期のものであると見られる。

④京都大学人文科学研究所蔵、二冊（上：楔子（第一回）～第四十回、下：第四十一回～百二十回）。外題、内題『水滸傳譯解』。印記：「有不爲齋」「□山樓記」（□は文字が不明瞭であることを示す。以下同）。「有不爲齋」は漢学者伊藤介夫の号。伊藤介夫（天保四／一八三三―大正一／一九一二）、名は和、字は介夫、子固、通称は軍八。号は有不爲齋の他に雪香を名乗った。漢詩文に優れ、幕府の清国への特使派遣の際に通訳として同行したこともある。蔵書家として知られ、特に大阪学問所懐徳堂に強い関心を持ち、散逸してしまった懐徳堂関係の書籍の収集保存に努めた。没後、昭和十四（一九三九）年にその蔵書のうち懐徳堂旧蔵のものは重建懐徳堂に寄贈されている[17]。その他の蔵書も同年に売りたてが行われ、『水滸傳譯解』もその入札目録の中に書名が見える[18]。

⑤国立国会図書館蔵、一冊（第一回～百二十回）。外題、内題『水滸傳譯解』。印記：「西尾文庫」「永根氏家蔵印」「文峰学人」。

永根氏の印は書家永根伍石のもの[19]。巻末に伍石によると見られる文がある（後述）。永根伍石（明和二／一七六五―天保九／一八三八）、名は鉉、字は仲鼎、元鼎、号は伍石の他に氷斎、氷道人、槃散散人、無仏称尊等があり、通称は勇八郎。盛岡の人で、江戸に出て下谷御徒町に住んだが、後に盛岡に帰っている[20]。この講義録については石崎又造氏の言及があり、文峰は江戸後期の書家永根文峰（享和二／

一八〇二―天保四／一八三三）であろうと推測されている。[21]

現在は一冊の形だが、小口書きは「乾　水滸」「坤　水滸」と二つあり、また第四十一回の頁に「永根氏家蔵印」があることから、元は第一回～四十回、第四十一回～百二十回の二冊であったことが疑われる。

⑥天理大学附属天理図書館蔵（請求番号：923-1③）、二冊（第一回～四十回、第四十一回～百二十回）。外題なし、内題『水滸傳譯解』。印記：「廣池蔵書」「昭和参年四月壹日　寄贈　廣池文庫　廣池千九郎」

廣池千九郎（慶応二／一八六六―昭和十三／一九三八）は明治から昭和前期の歴史家、教育者等として知られる。研究分野は歴史、文法、東洋法制史、日本の精神文化、モラロジー（道徳科学）など多岐に渡り、著書に漢文の文法書『支那文典』等がある。大分県の出身だが、明治二十八（一八九五）年東京へ出て『古事類苑』の編集に従事し、また昭和十（一九三五）年には道徳科学専攻塾（現麗沢大学）を創設した。[22]

⑦西尾市立図書館岩瀬文庫蔵、一冊（第一回～十一回）。[23]外題『水滸傳譯解』、内題『水滸傳譯解』。内容が第十一回までで中断されている。筆者、成立年共に記載がないが、山本封山筆、近世中期頃の成立と目されている。また、山本読書室旧蔵本と推定されている。[24]

山本封山（寛保二／一七四二―文化十／一八一三）、名は有香、字は蘭卿、通称中郎、封山と号した。若くして西本願寺に勤仕し、第十八世宗主文如上人の侍読となる。天明六（一七八六）年、退職する際に文如上人から学問所「読書室」なる一堂を与えられ、ここを講堂とした。儒医、儒者としての名声高く、門人はおよそ数百名いたと推定されている。また封山の読書法は書を写すことにあり、その写本は膨大な量に達したという。[25]

封山が仕えていた文如上人は、西本願寺の門主が代々引き継ぐ一大漢籍コレクション、写字台文庫の集書をした人物であり、京都書肆風月堂（七代目主人の頃か）から明清の通俗小説を買入れていた可能性があるという。[26]②の澤田一斎筆記本と関連する可能性が考えられる。

⑧関西大学図書館長澤文庫蔵（請求番号：L23D6190）、一冊（第一回～百二十回）。外題、内題『水滸傳譯解』。印記：「東京木挽町五丁目吉高嶋」

⑨慶応義塾図書館蔵、三冊（上：第一回～十八回、中：第十九回～四十五回、下：第四十六回～百二十回）。外題、内題『水滸傳譯解』。

⑩関西大学図書館長澤文庫蔵（請求番号：L23D6543、L23D6544）、二冊（天：第一回～二十五回、地：第二十六回～百二十回）。外題、内題『水滸傳譯解』。

⑪京都大学文学研究科図書館蔵、六冊（巻之一：第一回～七回、巻之二：第八回～二十五回、巻之三：第二十六回～四十五回、巻之四：第四十六回～六十三回、巻之五：第六十四回～九十二回、巻之六：第

九十三回～百二十回）。外題なし、内題『水滸傳譯』。巻之五を除く五冊の巻頭に「物茂卿著」とある。

⑫九州大学附属図書館逍遥文庫蔵、三冊（第一回～十八回、第十九回～四十五回、第四十六回～百二十回）。外題なし、内題『水滸傳譯解』。印記：「逍遥文庫　宗盛一氏寄贈」。

逍遥文庫は修猷館教授宗盛年（文政七／一八二四―明治三十七／一九〇四）の旧蔵書。亀井昭陽等、福岡を代表する儒者の旧蔵書を多数含み、経史子集を網羅する。[27]

⑬静嘉堂文庫蔵、二冊（一二：第一回～二十九回、三四：第三十回～百二十回）。外題、内題『水滸伝譯解』。印記：「松井氏蔵書章」「浣胃書屋」

松井氏は明治から昭和初頭の国文学者、松井簡治（文久三／一八六三―昭和二十／一九四五）。上田万年と『大日本国語辞典』全五巻を編集したことで知られる。[28] 昭和十（一九三五）年にその蔵書が静嘉堂文庫に収蔵されている。[29]

一冊目の表紙に『水滸伝』引首中の詩、表紙の見返し部分に第三十三回からの引用が書き付けられている。二冊目の表紙とその見返し部分には、清代の好色小説『肉蒲団』第十一回に見える、主人公未央生と艶芳の手紙の内容が書き付けられている。[30] ⑤と同様、現在は二冊にまとめられているが、蔵書印等から元は四冊（第一回～十回、第十一回～二十九回、第三十回～六十七回、第六十八回～百二十回）であったことが窺われる。墨、朱による書き込みが多く見られる。

⑭天理大学附属天理図書館蔵（請求番号：923-1 ②）、四冊（巻一：第一回～十回、巻二：第十一回～二十九回、巻三：第三十回～六十七回、巻四：第六十八回～百二十回）。外題、内題『水滸傳譯解』。印記：「廣池蔵書」「昭和参年四月壹日　寄贈　廣池文庫　廣池千九郎」「黙斎」

⑮天理大学附属天理図書館蔵（請求番号：923-1）、一冊（第一回～十回）。外題、内題『水滸傳譯解』。印記：「廣池蔵書」。

内容は第十回までで中断している。⑭と大変近似した内容を持っており、欄外に見える細かな書き込み等も一致することから、⑭を写したものであることが疑われる。

次の表は以上十五部の講義録の情報をまとめたものである。以下各講義録については表上段の番号で示す。本文と併せて参照されたい。

表一

	外題	冊数	筆記者	成立	所蔵	備考
①	水滸全傳譯解	三	艮斎	享保十二年	関西大学図書館 長澤文庫	印記：「蔦廼家文庫」「静盦蔵書」
②	水滸傳譯	二	澤田重淵	江戸	大東急記念文庫	印記：「東山高臥」「重岡」
③	水滸傳解	二	不明	不明	東京大学文学部 国語研究室	内題『南関先生水滸傳解』。 巻末に「水滸傳鈔譯」、「再生記畧」あり。 墨書、朱筆書入が多く、書入中に「明治十六年」～「明治二十二年」の年記あり。
④	水滸傳譯解	二	不明	不明	京都大学 人文科学研究所	印記：「有不爲齋」「□山樓記」
⑤	水滸傳譯解	一	不明	不明	国立国会図書館	印記：「西尾文庫」「文峰学人」「永根氏家蔵印」
⑥	水滸傳譯解	二	不明	不明	天理大学附属 天理図書館	印記：「廣池蔵書」「昭和参年四月壹日　寄贈　廣池文庫　廣池千九郎」
⑦	水滸傳譯解	一	山本封山か	近世中期か	西尾市岩瀬文庫	第一回～十一回まで。
⑧	水滸傳譯解	一	不明	不明	関西大学図書館 長澤文庫	印記：「東京木挽町五丁目吉高嶋」
⑨	水滸傳譯解	三	不明	不明	慶応義塾 図書館	
⑩	水滸傳譯解	二	不明	不明	関西大学図書館 長澤文庫	
⑪	なし 内題：水滸傳譯	六	不明	不明	京都大学文学研究科 図書館	巻之五以外の巻頭に「物茂卿著」とあり。
⑫	なし 内題：水滸傳譯解	三	不明	不明	九州大学附属図書館 逍遥文庫	修猷館教授宗盛年（号逍遥）の旧蔵。
⑬	水滸伝譯解	二	不明	不明	静嘉堂文庫	印記：「松井氏蔵書章」「浣胃書屋」 墨書、朱筆書入が多い。
⑭	水滸傳譯解	四	不明	不明	天理大学附属 天理図書館	印記：「廣池蔵書」「昭和参年四月壹日　寄贈　廣池文庫　廣池千九郎」「黙斎」
⑮	水滸傳譯解	一	不明	不明	天理大学附属 天理図書館	第一回～十回まで。 印記：「廣池蔵書」

※この他、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースより、旧大阪女子大学蔵本（一冊）、大阪天満宮蔵本（二冊）、無窮会図書館蔵本（四冊、二冊）等が確認出来るが未見。

三、成立について

先に述べたように、現存する全ての講義録が講義を直接受講した人物によるものであるとは思われない。例えば、⑪の講義録には次のような記述が見られる（傍線は私に付した。また合字、畳字は該当する仮名に改めた。以下同。）。

第五十一回
既是出名奈何了他只是一怪（ウラミ）
出名ハアイテニ成ルコト也　既是我名ヲ出シ訴ヘテ心マカセニナリタルヲ只是ウラミハ禁子シト也○此ノ解不詳可考必有脱字

第五十六回
將次死　ヲヲツケニシネカシトシテト也　此ノ解落字アリ

第六十一回
若賽錦体由你是誰（ソト）都輸（ス）二与他（ニ）一
由你是ートハ你ハ是誰ソヤトハ云セテヲカヌト云コト也　一説ニ若賽ーーーー由你ーーモ都テ○此ノ処落字

次に①の該当箇所を挙げる。

第五十一回
既是出（レ）（シテ）名（スキニスル）二奈何了（ル）他（ヲ）一只是一怪（ウラミハ）
出名ハアイテニナルコト也　既ニ是我名ヲ出シ訴ヘテ心マカセニナリタルヲ只是ウラミハ禁子也トナリ

第五十六回
將（ヲヲツケニ）次死（セントシテ）
若（カケモノニスル意）二賽錦体一由（ンヤ）二你是誰一（ト云ニ）都輸二与（ス）他一
賽錦体ハスマフトリヲ云也　由二你是誰一トハ你ハ是誰ソヤトハイハセテヲカヌト云コト也　一説若（ハ）二賽錦体一ノ由你是誰（モ）都テ

⑪の傍線部では内容に「脱字」「落字」があると指摘されており、⑪は直接講義を受講して筆記したものではなく、先に成立した講義録を書き写したものであることが窺われる。①と比較すると、訓点等の細かな文字が抜けてはいるが、大きな脱字があるようには思われない。

また、同本には終盤の内容に大きな問題点がある。まず第百四回の内容が①と比較すると不足しており、不足の一部が第百十二回と第百十三回をまとめた「百十二　三回」の項の内容に組み込まれる形になっている。次に①と⑪が百四回と百十二三回（①は百十三回）の項

表二

百十三回

①
宜興小港
扇圈胡鬚
腆起胸脯
隨你們拿我三箇那那去
近来一冬
准敵
緝聽
縛做一串把大石頭墜定抛在太湖裡
砲籠
虎丘
你我相傷

百十二　三回

⑪
月老方纔旺相
恐怕行聘
做家的人
補蛙
交拜合巹等頂
姑丈
煖房
老嬤
知趣去了
麽羞恥
主腰児
恁般要緊
新房外又有嘴
他見老婆来得
怎麽好々不知利害諢
没走一頭処
抱雞窠
瓦罐々
三層鉄甲如劈風一般過去
矛孝

百四回

①	⑪
…中略…	
曾會過来	曾會過来
外公姓	外好姓
好記分	好記分
我説是姓生	我説是姓王
看子平的妙訣	看子平的妙訣
鋤頭般的脚	鋤頭般的脚
把貴造与小子推筭	把貴造与小子推筭
那里有這様好八字	那里有這様好八字
紅鳶照臨	紅鸞照臨
肚夫	肚夫
適纔曽合過来	適纔曽合過来
銅盆鉄帚	銅盆鉄帚
作成小子喫盃喜酒	
将機就機	将機就機
	天實厭之
極妙的了	
惶恐々々	
看中意了對頭児	
指望多説些聘金	
月老方纔旺相	
恐怕行聘	
講過两家	
都省	
做家的人	
捕蛙	
交拜合巹等頂	
姑丈	
煖房	
老嬤	
知趣去了	
過来人	
慣家児	
不害甚麽羞耻	
主腰児	
莫要歪纏恁般要緊	
新房外又有嘴	
也笑得歪的一椿事児	
他見老婆来得	
怎麽好々	
不知利害	
諢	
没走一頭処	
抱雞窠	
同了黄達云々眼	
欺慣了官兵没用	
瓦罐云々	

で取り上げている語句の一部を示す（網掛けをした語句は①の百四回と⑪の百十二三回に共通して見られるものであり、二重枠で囲んだ部分は①の百十四回に見える語句である。）。

『水滸伝』本文と照合すると、①の状態が正しいことが確認出来る。[31] ⑪では「百十二三回」と題された項に第百四回と第百十四回の内容が記述され、大きな混乱が起こっていることが見受けられる。受講した内容をそのまま筆記してこのような形になるとは考えづらく、⑪が筆写した講義録、或いは更にその祖本に、何らかの問題が生じていたことが推測される。例えば本を綴じ直した際に頁の順番を誤った等の要因が考えられる。また⑪に似た状態が⑨にも見られ、二つの講義録は同じ祖本を持つことが窺われる。⑨と⑪には他にも共通する特徴が見

られるが、後述するように⑨がより原講義録に近いと思われる。

更に、①以外には白駒の名前を示すものがないが、抄写によって伝わっていく間に講師が誰であったのか認識されないようになっていったことが見受けられる。次に⑤の末に付された旧蔵者によると見られる記述を示す。[32]

水滸傳譯解一百廿回未知誰氏所解、此抄本先堂叔弄愚翁手書、翁損舘之後得之於故紙堆中、重装敬貯、吁隙駒難駐人與物非也、為之涙涔々下矣　　鉉敬識

ここからは、永根伍石（鉉）のおじが⑤の本文を筆記したことが窺われるが、伍石の存命の間、享和から天保の頃には誰の訳解であるのか不明の状態になっていたことが読み取れる。

③は「南関先生」という白駒ではない人物の名前が記されているが、⑤の例のようにに講師が不明になった為に誤って付されたことが疑われる。⑪も白駒ではなく「物茂卿」、すなわち荻生徂徠（寛文六／一六六六―享保十三／一七二八）の著であると記されている。徂徠は唐話学習の必要性を提唱した人物であり、岡嶋冠山を講師として招いて唐話を学んでいたことが知られている。その学習の一環として『水滸伝』も読んでいたことが推測されているが、[33]徂徠自ら『水滸伝』を百二十回分講じることがあったかは疑問である。仮に徂徠が講じたものであったとすると、①の巻末の記載と矛盾することになる。或いは白駒の講じたものを徂徠が筆記したとも読み取れるが、徂徠が享保年間に京阪へ赴いて受講したとは考え難く、彼の没年から見てもその可能性は低いと考えられる。[34]おそらくは後に講義録を抄写した人物が、思い違いをしたものではないだろうか。

現存の講義録のほとんどは成立時期が不明だが、筆写を繰り返して成立したことが窺われ、すでに失われた講義録も多いと推測される。

四、各講義録の関係について

次に本文の異同から、各講義録の継承関係について検討する。十五部の講義録は同じ講義から派生したと見て差支えないように思えるが、詳細に比較していくと異なる記述を持つ項目がある。まず、その中でも大きな違いであり、講義録の成立を考える上でも重要な問題となる、岡嶋冠山に関係する部分を見ていきたい。先にも触れたが、冠山は白駒に先行する唐話学者で、白駒の唐話学に大きな影響を与えたと考えられている人物である。[35]解説中の冠山の名前の有無によって、講義録を大きく分類することが出来る。既に注三、四所引の拙稿でいくつかの講義録について指摘しているが、新たに確認したものと併せて、次に各講義録の例と、該当部分の本文、日本語訳を挙げる。[36]

第二十六回「出熱」

①出熱　ヤキバ也　到処ハ何クニテモヤキバシヤゾ

②出熱　セワヤクコト　冠山ハヤキハ也到処何クデモヤキバジヤト云ヘリ　アヤマリナリ

③出熱　世話ヤク事　冠山ハ焼場也到処何クテモヤキバジヤトイヘリ　誤リ也

④出熱　セワヤクコト　冠山ハヤキハ也　到処何(イ)クラモヤキバジヤト云ヘリ　アヤマリ也

⑤出熱　セワヤクコト　冠山ハヤキバ也到処何クヲモヤキバジヤト云ヘリ　アヤマリナリ

⑥出熱　セワヤクノ　冠山ハヤキバ也　到処何クヲモヤキバシヤト云ヘリ　アヤマリナリ

⑦該当箇所なし（第十一回までの為）

⑧出熱　セワヤクコト　冠山ハヤキハ也到処何クデモヤキバジヤト云ヘリ　アヤマリナリ

⑨出熱　ヤキバ也到処ハ何クニテモヤキバシヤソ

⑩出熱　ヤキバ也　到処ハ何ニテモヤキバジヤソ

⑪出レ熱ヤキバ也　到処ハイヅクニテモヤキバジヤソト

⑫出熱　ヤキバナリ　到處ハ何ニテモヤキバジヤソ

⑬到　處　出スレ熱ヲ（ネンコロニヤヤクレコト）
何九叔カ云フンニワタクシトモノ到処ハトコトテモ熱ノ出ルヤウナイヤナ処ヘハカクマイルカツトメ也サノミクラフト思ハレナ

⑭到處出タスレ熱ヲ
何九叔ガ云ブジニワタクシドモノ到処ハドコトテモ熱ノ出ルヤウナイヤナ処ヘバカリマイルガツトメ也サノミクラフト思ハレナ

⑮該当箇所なし（第十回までの為）

【本文】

何九叔道、小人到處只是出熱、娘子和乾娘自穩便齋堂裏去、相待衆隣舍街坊…

（何九叔、「わたくしはどこへ行っても世話を焼きたくなるのです。奥さんとおばさんとは、御自由になすって、待合所でご近所の方の相手をしていて下さい。…」）

第六十一回「若賽錦体由你是誰都輪与他」

①若二賽錦体（カケモノニスル意）一由二（ンヤ）你是誰一（ト云ニ）都輪二与ス他一

賽錦体ハスマフトリヲ云也　由二你是誰一トハ你ハ是誰ソヤトハイハセテヲカヌト云コト也　一説若ハ二賽錦体ノ一由你是誰モ都テ

②若二賽錦體（カケモノニスル意）ノ一由二（ンヤ）你ハ是レ誰一（ソト云ニ）都テ輪二與ス他ニ一

賽錦體ハスマフトリヲ云　由二你ヵ是一誰一トハ你ハ是誰ソヤトイハセテヲカヌト云コト也　一説若ハ二賽錦體ノ由ルル你ニ是誰シモ都テ云々冠山説

③若賽錦體（カケモノニスル意）由二你是誰都輪與他一

賽錦体ハスマフトリヲ云　由你是誰トハ你ハ是誰ソヤトイワセラレタトイフ事也　一説若二賽錦躰一由你是誰都云々冠山説

④若二賽一錦一體（カケモノニスル意）一由二（ンヤ）你ハ是レ誰一（ソト云ニ）都テ輪一與ス他ニ

賽錦体ハスマフトリヲ云　由你是誰トハ你ハ是誰ソヤトイハセテ

オクト云コト也　一説若ハ賽錦躰ノ由レ你是誰シモ都テ云々**冠山説**

⑤若二賽錦體ノ由一ンヤ你ハ是レ誰一ソト云ニ都テ輸二與ス他一ニ

賽錦體ハスマフトリヲ云　由二你カ是レ誰一トハ你ハ是誰ソヤトイハセテヲカヌト云コト也　一説若ハ賽錦體ノ由ルレ你ニ是誰シモ都テ云々**冠山説**

⑥若賽錦體由ンヤ你是誰ソトニテ都輸與他一ニ

賽錦體ハスマフトリヲ云　由御是誰トハ你ハ是誰ソヤトイハセテヲタト云コト也　一説若賽ニ錦躰一由レ你是誰都云云**冠山説**

⑦該当箇所なし

⑧若二賽錦體一ト云ニ都テ輸二與ス他一ニ

賽錦体ハスマフトリヲ云　由二你是誰トハ你ハ是誰ソヤトイハセテヲカヌト云コト也　一説若二賽錦體一由レ你ニ是誰シモ都テ云々**冠山説**

⑨若三賽錦体由ンヤ你是誰一ソト云ニ都輸二與ス他一ニ

賽錦体ハママウトリヲ云也　由二你是誰一トハ你ハ是誰ソヤトハイハセテヲカヌト云コト也　一説若二賽一一ノ由ルレ你ニ是誰モ都テ

⑩若二賽錦体一由ンヤ你是誰一ソト云ニ都輸二与ス他一ニ

賽錦体ハスマウトリヲ云也　由二你カ是誰一トハ你ハ是誰ソヤトハイハセテヲカヌト云コト也　一説若ハ賽錦体ノ由ルレ你ニ是誰シモ都テ

⑪若賽錦体由你是誰ソト都輸二与他一ニ

由你是一トハ你ハ是誰ソヤトハ云セテヲカヌト云コト也　一説ニ若賽一一一一由你一一モ都テ○此ノ処落字

⑫若二賽錦体由ンヤ你是誰一ソト云ニ都輸二與ス他一ニ

賽錦体ハスマウトリヲ云ナリ　由二你カ是誰一トハ你ハ是誰ソヤトハイハセテヲカスト云コト也　一説若二賽一一ノ由レ你ニ是誰モ都ベテ

⑬若二賽錦体一由ンヤ你是誰一ソト云ニ都輸二与ス他一ニ

賽錦体ハスマウトリヲ云也　由二你カ是誰一トハ你ハ是誰ソヤトハイハセテヲカヌト云コト也　一説若ハ賽錦体ノ由ルレ你ニ是誰シモ都テ

⑭若ク賽錦体一由ランヤ你是レ誰一レカ云ニ都テ輸二与ス他一ニ

賽錦体ハスマウトリヲ云也　由ンヤ你ガ是レ誰一トハサキノ相手ガ你カ何ホドノモノデ有フゾトアナドラセ云ハセテハヲカヌト云コト也　一説ニ若キ賽錦体ノ由ルレ你ニ是レ誰シモ都テ輸二与ス他ヲ一

⑮該当箇所なし

【本文】

盧俊義叫一箇高手匠人、與他刺了這一身遍體花繡、却似玉亭柱上鋪着軟翠、若賽錦體由你是誰都輸與他、…

（盧俊義が名人上手にいいつけて、からだ一面にほりものをほらせましたが、玉のあずまやの柱に、やわらかいかわせみの羽をしきつめたがごとく、錦のからだと見まがうほどで、誰であろうとかなうものはありません。…）

また、②には第二回に冠山を批判している箇所がある。

第二回

②只要ド尋レテ人ヲ使ツカフヲ二家生ヲ一

凡吾スキテ好コトヲ業トスル寸ハ家生ト云　此時家生ハ刺レ〈金奉（ヤリヲ）〉使レ捧也（上から朱の線で消してある）

（上欄・朱筆）家人女昏配所生之子謂之家生　冠山解杜撰甚矣

この項に冠山の名前があるのは②の一斎筆記のものだけだが、この訂正後の内容を書くものは確認することが出来る。

第二回「家生」

①只要ト尋レ人使二家生一（兵具ノコト）云云上　人ニ家□□サセル

打太刀ニナルモノヲヤトフテ（「尋」に対して付される）

②右の通り

③只要尋人使二家生一　家人女昏配所生之子謂之家生

④只三要尋テ人ヲ使二フヲ家生一ヲ　家人男女昏配所生之子謂之家生

⑤只要ト尋テ人ヲ使（ツカフテ）二家生一ヲ　家人男女昏配所生之子謂二之家生一

⑥只要ト尋レ人使二家生一　家人女昏配所生之子謂之家生

⑦只要ト尋テ人ヲ使（ツカフ）二家生一　家人女昏配所生之子謂之家生

⑧家生　凡吾スイテ好コトヲ業トスルヲ家生ト云

⑨只要ト尋テ人使テ二家生一

凡吾スイテ好コトヲ業トスル寸ハ家生ト云　此時家生ハ刺鎗使捧也

⑩只要ト尋レテ人使テ二家生一ヲ

凡吾スキテ好コトヲ業トスル寸ハ家生ト云　此時家生ハ刺鎗使捧也

⑪只要尋人使家生

凡吾スキタルコトヲ業トスル寸ハ家生ト云　此時家生ハ刺鎗使捧也

⑫只要ト尋レテ人使テ二家生一

凡吾スキテ好コトヲ業トスル寸ハ家生ト云　此時家生ハ刺鎗使捧ナリ

⑬只要尋人ヲレ使（人ヲ屋フコト）二家一生一云々　人ニ家業ヲサセル

（上欄・朱筆）家生　農家ニテ男女ノ家来カ夫婦ニナリ其主ニテ生レタル子ヲ庭子ト云又ソレカ別家ヲ持テハ被官ト云

⑭只要ス尋テ下レ人ヲ使（セシメテ）二家一生一ヲ云々　人ニ家業ヲサセル

⑮只要ス尋テ下レ人ヲ使（セシメテ）二家一生一ヲ云々上　人ニ家業ヲサセル

【本文】

史進家自此無人管業、史進又不負農、只要尋人使家生、較量鎗棒使棒也…

（史進の家では、以後、財産管理をする人もない上に、史進は百姓仕事に精出そうとせず、相手を探しては得物を持って槍棒の試合をするばかり。…）

以上の箇所に冠山の名前が見られるが、冠山による唐話辞書等に右のような解説は管見の限り見られない。なぜこれらの例に冠山の名前が見られるのか、要因は現段階では不明であり、今後更に調査を要するものである。また、第二十六回と第二回の例は、冠山の名前の有無だけでなく、解説の内容が講義録によってはっきりと異なる例でもある。おそらく近世期の白話研究者の中でも解釈が分かれるものであったのではないだろうか。例えば、第二十六回と第二回の例で②～⑥、⑦が記している解釈は、陶山南濤による解釈に近似している。[37] 第二

回の②や⑬の例のように上欄に後から書き込まれたものが、本文中に挿入され、そのまま継承されてきた可能性が考えられる。

このように冠山の名前に着目して見ていくと、②～⑥が常に冠山に関連するグループに分類されるが、これらの講義録には他にも共通する特徴が見られる。

まず②③④⑥は全て第一～四十回、第四十一～百二十回の二冊本であり、⑤も元はこの形であったことが窺われる。次に、第十～十四回までの内容が、①と比べると不足している。以前注四所引の拙稿で①艮斎筆記本と②一斎筆記本の項目数を比較し、②の内容が不足していることを指摘したが、③④⑤⑥も②とほぼ同様の状況を見ることが出来る。また⑦も第十回、十一回の範囲ではあるが、同じ特徴を見ることが出来る。表三に各講義録が第十回で取り上げている語句を示す。（講義録によって取り上げる語句の順番が僅かに異なる箇所があるが、表では①を基準として順番を統一し、各講義録が有する語句の関連を示した。また、（　）内に示す語句は講義録の本文中ではなく上欄等に記されていることを示す。）

表三

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
酒主兒	酒主兒	酒主兒	酒主兒	酒主兒	酒主兒	酒主兒	酒主兒	酒主兒	酒主兒	酒主兒	酒主兒	酒主兒	酒主兒	酒主兒
陪話							陪話	陪話	陪話	陪話	陪話			
陪							陪了	陪	陪	陪	陪			
												（撞見）		
不着							不着	不着	不着	不着	不着			
							（好汁水）							
							迤逗							
過賣							過賣	過賣順當	過賣	過賣順当	過賣順当	（過賣）		
順當	順當	順當	順當	順當	順當	順當	順當		順當			順當	順當	順當
							刺							
（討錢）							討錢	討錢	（討錢）	討錢	討錢	（討錢）		
生事							生事		生事					
漿洗	漿洗	漿洗	漿洗	漿洗	漿洗	漿洗	漿洗		漿洗			漿洗	漿洗	漿洗
								不順當		不順當	不順当			
（不時間）							不時間	不時間	（不時間）	不時間	不時間	（不時間）		
本錢							本錢		本錢					
（那箇人）							那箇人	那箇人	（那箇人）	那箇人	那箇人			
（這箇人）							這箇人	那箇人	（這箇人）		那箇人			
副勧盤	勧盤	勧盤	勧盤	勧盤	勧盤	勧盤	副勸盤	副勧盤	副勧盤	副勧盤	副勧盤	勧盤	勧盤	勧盤
擯梭							擯梭	擯梭	擯梭	擯梭	擯梭	（擯梭也似）		
湯桶	湯桶	湯桶	湯桶	湯桶	湯桶	湯桶	湯桶	湯桶	湯桶	湯桶	湯桶	湯桶	湯桶	湯桶
大姐							大姐	大姐	大姐	大姐	大姐			
不尭尬	不尭尬	不尭尬	不※尬	不尭尬	不尭尬	不尭尬	不※尬	不尭	不尭	不尭	不尭	不尭尬	不尭尬	不尭尬
												（訥出）		
							牙癡							
摸不着	摸不着	摸不着	摸不着	摸不着	摸不着	摸不着	摸不着	摸不着	摸不着	摸不着	模不着	摸不着	摸不着	摸不着
							帕子							
逓與							逓與	逓與	逓與	逓与	逓與			
低着頭							低着頭	低着頭	低着頭	低着頭	低着頭	低着頭	低着頭	低着頭
轉背							轉背	轉背	轉背	轉背	轉背	轉背	轉背	轉背

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
臨了	臨了	臨了	臨了	臨了	臨了	臨了	臨了	臨了	臨了	臨了	臨了	臨了	臨了	臨了
五短身材	五短身材	五短身材	五短身材	五短身材	五短身材	五短身材	五短身才	五短身材	五短身材	五短身材	五短身材	五短身材	五短身材	五短身材
沒甚一							沒甚一	沒甚一	沒甚一		沒甚一	沒甚髯鬚	沒甚髯鬚	沒甚髯鬚
潑賤賊							潑賤賊	潑賤賊	潑賤賊	潑賤賊	潑賤賊			
消耗							消毛	消耗	消耗		消耗			
一地裡								一地裡	一地裡	一地理	一地裡	(一地里)		
常例錢							常例錢	常例錢	常例錢	常例錢	常例錢			
只顧如此	只願如此	只顧如此	只顧如此	只顧如此	尺顧如此	只願如此	只願如此	只願如此	只願如此	只願如此	只願如此	只願如此	只顧如此	只顧如此
放子細便了	放仔細便了	放仔細便了	放仔細便了	放仔細便了	放仔細便了	放仔細便了	放子細	放子細便了	放子細便了	放子細便了	放子細便了	放仔細便了	放仔細便了	放仔細便了
閣	閣	閣	閣	閣	閣	閣	閣	閣	閣	閣	閣	閣	閣	閣
交割							交割	交割	交割	交割	交割			
							差使							
好是天王堂	又好是天王堂	又好是天王堂	又好是天王堂	又好是天王堂	又好是天王堂	又好是天王堂	好是天王堂	好是天王堂	好是天王堂		好是天王堂	又好是天王堂	又好是天王堂	又好是天王堂
							不能殺							
												(過幾時)		
工夫来							工夫来	工夫来	工夫来	工夫来	工夫来			
就時	就時	就時	就時	就時	就時	就時	就時	就時	就時	就時	就時	就時	就時	就時
							両扇							
							倉厰							
							鑰匙							
							大葫蘆							
							一堆柴炭云々生在							
泥水匠	泥水匠	泥水匠	泥水匠	泥水匠	泥水匠	泥水匠	泥水匠	泥水匠	泥水匠	泥水匠	泥水匠	泥水匠	泥水匠	泥水匠
							庇佑							
							籬笆							
(露天裡)	露天裡	露天裡	露天裡	露天裡	露天裡	露天裡	露天裡	露天裡	(露天裡)	露天裡	露天裡	露天裡	露天裡	露天裡
接風							接風	接風	接風	接風	接風	接風	接風	接風
							胖官							
							堆着一堆紙團々看来							
(掃鳥)							掃	掃	(掃鳥)	掃	掃	(掃)		
搬開破壁	搬開破壁	搬開破壁	搬開破壁	搬開破壁	搬開破壁	搬開破壁	搬開破壁	攢開破壁	搬開破壁	攢開破壁	攢（搬）開破壁	搬開破壁	搬開破壁	搬開破壁
(鑽)							鑽	鑽	(鑽)		鑽			
必々剥々地							必々剥々地	必々剥々地	必々剥々地	必々剥々地	必々剥々地			
拷拷							拷拷	拷拷	拷拷	拷栳	栲栳			
争些児							争些児	争些兒	争些児	争些児	争些児			
刮々雑々							刮々雑々	刮々雑々	刮々雑々	刮々雑々	刮々雑々			
立地							立地	立地	立地	立地	立地	立地	立地	立地
條計好麽							條計好麽	條計好麽	條計好麽	條計好麽	條計好麽			
没的推故							没得推故	没的推故	没的推故		没的推故			
對付							對付	對付	對付	對付	對付			
托人情去	托人情去	托人情去	托人情去	托人情去	托人情去	托人情去	托人情去	托人情去	托人情去	托人情去	托人情去	托人情去	托人情去	托人情去
説你的女壻云云							説你的女壻云々	説你的女壻云云	説你的女壻云々	説你的女壻	説你的女壻云云			
央浼							央浼	央浼	央浼	央浼	央浼	(央浼)		
早晩							早晩	早晩	早晩	早晩	早晩			
回城裡去							回城裏去	回城裡去	回城裡去	回城裡去	回城裡去			
再看一看							再看一看	再看一看	再看一看	再看一看	再看一看			
准定							准定	准定	准定	准定	准定	准定	准定	准定
肐察							肐察	肐察	肐察	肐察	肐察			
嚇							嚇的	嚇	嚇	嚇	嚇			
後心							後心	後心	後心	後心	後心			
批胷	批胷	批胷	批胷	批胷	批胷	批胷	批胸	批胷	批胷		批胷	批胷	批胷	批胷
閣着	閣着	閣着	閣着	閣着	閣着	閣着	閣着	閣着	閣着	閣着	閣着	閣着	閣着	閣着
殺人可恕云々	殺人可恕情裏難容	殺人可恕情裏難容	殺人可恕情裏難容	殺人可恕情裏難容	殺人可恕情裏難容	殺人可恕情裏難容	殺人可怨云々	殺人可怒云々	殺人可恕云々	殺人可怒	殺人可怒(恕)云云	殺人可怒(恕)云云	殺人可恕云云	殺人可恕云云
剜							剜	剜	剜	剜	剜	剜	剜	剜
鈎子							鈎子	鈎子	鈎子	鈎子	鈎子	鈎子	鈎子	鈎子
更次							更次	更次	更次	更次	更次			
庄家							莊家	庄家	庄家	庄家	庄家			
煨着	煨着	煨着	煨着	煨着	煨着	煨着	煨着	煨着	煨着	煨着	煨着	煨着	煨着	煨着
												(挑)		
	回些酒	回些酒	回些酒	回些酒	回些酒	回些酒						回些酒	回些酒	回些酒
瓮児							瓮児	瓮兒	瓮児	瓮兒	瓮兒	瓮児	瓮児	瓮児
輪流							輪流	輪流	輪流	輪流	輪流			

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
							擔							
不勾							不勾	不勾休纏	不勾		不勾	不勾	不勾	不勾
休纏							休纏		休纏	休纏	休纏	休纏	休纏	休纏
没奈何回些罷	没奈何回些罷	没奈何回此罷		（没奈何回些罷）	（没奈何回些罷）	没奈何回些罷	没奈何田些罷	没奈何回些罷	没奈何回些罷	没奈何回些羅	没奈何回些罷	没奈何回些罷	没奈何回些罷	没奈何回些罷
							弔在這里							
捍							捍	捍	捍	捍一発上手	桿一発上手			
（土坑）							土坑	土坑	（土坑）	土坑	土坑	土坑	土坑	土坑
							椰瓢					（椰瓢）		
							一會							
一発上手	一渋上手	一發上手		一渋上手	一發上手	一渋上手	一渋上手	一渋上手	一発上手			一発上手	一発上手	一発上手
							蓼兒洼内							

更に、この②～⑦のみ解説中で中国の事を「西土」と書くことがある。次に各講義録の例を挙げる。

第三回「酒樓」（以下見出し語は省略。）

①酒ヤノ二楷也　華ニテハ今ノ茶ヤノ如ニテ造酒ヤ　即茶ヤ也

②酒ヤノ二楷也　**西土**ニテハ此方ノ茶ヤノ如ニテ造酒ヤ　即茶ヤ也

③酒屋の二階也　**西土**にて此方茶店の如にて造酒や　即茶屋也

④酒屋ノ二階也　**西土**ニテハ此方ノ茶屋ノ如クニテ造酒ヤ　即茶屋也

⑤酒屋ノ二階ナリ　**西土**ニテハ此方茶屋ノ如ニテ造酒ヤ　即茶屋ナリ

⑥酒屋二階ナリ　**西土**ニテ此方茶ヤノ如ニテ造酒ヤ　即茶屋ナリ

⑦酒屋ノニ階也　**西土**ニテハ此方ノ茶店ノ如クニテ造リ酒ヤ　即茶店也

⑧酒ヤノ二階也　華ニテハ今ノ茶ヤノ如ニテ造酒ヤ　即茶ヤ也

⑨酒ヤノ二階也　華ニテハ今ノ茶ヤノ如ニテ造酒ヤ　即茶ヤ也

⑩酒ヤノ二階也　華ニテハ今ノ茶ヤノ如ニテ造酒ヤ　即茶ヤ也

⑪酒店ノ二階也　中華ハ酒造ハ只今ノ茶店也

⑫酒ヤノ二階ナリ　華ニテハ今ノ茶ヤノ如ニテ造リ酒カ　即茶ヤ也

⑬酒ヤノ二階也　華ニテハ今ノ茶ヤノ如クニテ造リ酒ヤ　即茶ヤ也

⑭酒ヤノ二階也　華ニテハ今ノ茶ヤノ如クニテ造リ酒ヤ　即茶ヤ也

⑮酒ヤノ二階也　華ニテハ今ノ茶ヤノ如クニテ造リ酒ヤ　即茶ヤ也

第十回「五短身材」

①中華ノ尺ミヂカシ　人ノタケ五尺ハ至極ヒキシーハ五尺以内ノ身

材也

②西土ノ尺ミヂカシ　人ノタケ五尺ハ至極ヒキシ―ハ五尺以内ノ身材也

③西土の尺短し　人長五尺といふハ至極低キ也　五尺以内身材也

④西土ノ尺ミヂカシ　人ノ長五尺ト云ハ至極ヒキキ也　五ーー五尺以内ノ身材也

⑤西土ノ尺ミヂカシ　人ノ長五尺ト云ハ至極ヒキキ也　五短五尺以内ノ身材也

⑥西土ノ尺ミチカシ　人長五尺ト云ハ至極ヒキキ也　五尺以内身材

⑦西土ノ尺ミヂカシ　人ノ長五尺ト云ハ至極ヒキキ也　五ーーーハ五尺以内ノ身材也

⑧中華ノ尺ミヂカシ　人ノタケ五尺ハ至極ヒクシ　五尺以内ノ身材也

⑨中華ノシヤクミヂカシ　人ノタケ五尺ハ至極ヒキシ　ーーハ五尺以内ノ身材ナリ

⑩中華ノ尺ミヂカシ　人ノタケ五尺ハ至極ヒキシ　ーハ五尺以内ノ身材也

⑪中華ノ尺短キユヘ人ノ長五尺ハシゴク短シ　五ーーハ五尺以内ノ身体也

⑫中華ノ尺ミヂカシ　人ノタケ五尺ハ至極ヒキシ　ーーハ五尺以内ノ身材ナリ

⑬中華ノ尺ミヂカシ　人ノタケ五尺ハシゴクヒキキ也　云々トハ五尺以内ノ身体

⑭中華ノ尺ミヂカシ　人ノタケ五尺ハシゴクヒキキ也　云云トハ五尺以内ノ身体

⑮中華ノ尺ミヂカシ　人ノタケ五尺ハシゴクヒクキ也　云云トハ五尺以内ノ身体

②～⑦では中国を指す名称として、他講義録に見られる「中華」「華」に加えて、右に挙げた「西土」を使うことがあるが、それぞれの使用箇所は一致している。偶然とは考えがたく、共通する祖本があったと推測される。

以下これら六部を②グループと呼び、グループ内での継承関係を検討したい。

四・a、②グループ内の継承

さて、②グループ内ではどれが最も早いもの（原講義録に近い内容を持つもの）と考えられるのだろうか。

先に取り上げた第二回「家生」の例では、③～⑦は②で一斎が後から朱筆で書き込んだ部分のみが書かれており、その前に線を引いて取り消した部分は書かれていなかった。ここから想定される状況は、他の講義録が一斎の訂正後を受け継いだ、或はその逆で一斎が他の講義録を見て訂正したというものである。どちらの可能性が高いのか、次に一斎の他の訂正部分について検討する。また参考として①の該当部分を挙げる。

第二回「排行第二」
②排ハナラブ列也　兄弟ノ坐スルモ嫡子ヨリ上ニナラビ次子ニバンメニナラブユヘ排行ト云（上から線で消す）
（朱筆）昭穆ヲ以云
③昭穆ヲ以云
④昭穆ヲ以云
⑤昭穆ヲ以云
⑥昭穆ヲ以テ云
⑦昭穆ヲ以テ云
※①排ハナラブ列也　兄弟ノ坐スルモ嫡子ヨリ上ニナラビ次子ニバンメニナラブユヘ排行ト云

第二十四回「鬼打更」
②時分ヲシラセルト云意ヲトル（上から線で消す）
○鬼ハ窮ーヒンホウ神大コウツサンスイナルコト
③鬼ハ窮―ビンホウ神　太鼓ウツ　サンスイナルコト
④鬼ハ窮ーヒンホウ神大コウツサンスイナルコト
⑤鬼ハ窮ービンホウ神大コウツサンスイナルコト
⑥鬼ハ窮ーヒンボウ神大コウツサンスイナルコト
⑦該当箇所なし
※①時分ヲシラセルト云意ヲトル
②を筆記した一斎が後から訂正し、それを他の筆記者が見て書き写したのか、逆に③～⑦を見て一斎が訂正したのか、どちらの可能性も否定は出来ないが、②が本来原講義録の①に近い内容を持っていたことが窺われる。

また、七十回本の利用の仕方に注目するとやはり②の内容が最も早いことが推測される。

第二十八回「斯」
②一作　孫　肉ヲムシリサキワケル也
（上欄）詩云斧以斯之是此斯字出處也　第五才子本注也　俗本作撕字
③作　孫　肉ニムシリサキワケルなり　詩ニ云斧以斯之是此斯字出處也　第五才子本注也　俗本作撕字
④一作　孫　肉ヲムシリサキワクル也　詩云斧以斯之是此斯字出處也　第五才子本注也　俗本作撕字
⑤一作　孫　肉ヲムシリサキワクルナリ　詩ニ云斧以斯之是此斯字出處也　第五才子本注也　俗本作撕字
⑥作　孫　肉ヲムシタカキワタルナリ　詩云斧以斯之是此斯字出處也　第五才子本注也　俗本作撕字
⑦該当箇所なし
※①肉ヲムシリサキワケル也　撕ト同シ

第二十八回「斯」の例では、②は本文ではなくその上欄に「第五才子本」、すなわち『水滸伝』の七十回本の注を引くが、③～⑥は最初から本文中に入れられている。

日本における七十回本の流布は、白駒が講義に利用した百回本や百二十回本よりも遅く、宝暦以降であると考えられている。[38] そのため、③～⑥は七十回本の内容を外側に書き込む②よりも後に成立したものと推測される。

中でも特に④は七十回本の影響を強く受けていると見られる。④は第一回を「楔子」としているが、これは七十回本を反映したものであると考えられる。七十回本は百二十回本を基に、第七十一回で物語が終わるように編集されたものであるが、最終回を「第七十回」にするために第一回を「楔子」とし、他版本の第二回の内容を「第一回」としている。④も他講義録の第二回を第一回と数え、第二十三回までは七十回本のように一回分ずれた見出しが付されるが、第二十四回以降は他講義録と同じ数え方になっている。

以上の検討から、①を原講義録と位置付けると、それに近い②が②グループの中では最も早く、③～⑥は②よりも後に成立した内容を伝えるものであると考えられる。⑦は内容が少ないため十分な検討が難しいが、一斎の朱筆書き込み等との関係から、③～⑥に準じるものであることが疑われる。

四‐b、その他の講義録について

ここでは②グループを除く九部の講義録の関係について検討を試みたい。

⑧は先に挙げた第二十六回「出熱」と第六十一回「若賽錦体由你是誰都輸与他」の項目に冠山の名前が見え、第二回「家生」は一斎の訂正前の解説であったことから、原講義録と②の継承の間の内容を伝えるものである可能性が考えられる。しかし、表三からも確認されるように、第一回から第二十回までの内容が他の講義録に比べて非常に多い。要因は不明であるが、頁に空白も多いことから、他の水滸辞書や講義録の内容も交ぜながら書いたものであることが想像される。第二十一回以降は②とほぼ同じ内容を持つ。

⑨と⑪に同様の問題が見られることはすでに三で指摘した通りである。更に共通する点として、第二十五回の後に本編によく出てくる人物呼称等の語をまとめた単語集のようなものが付されている。①の講義録では、巻頭に『水滸伝』各回に見られる「常言」（通俗的なことわざ）と、この単語集が付されている。他に常言が見られるのは⑧（巻末）⑩（巻頭）、単語集は⑨⑩⑪⑫（いずれも第二十五回の後）に見られる。

また、①⑨⑩⑫には第九十二回に「五六葉上八字ツツ入チガイアリ其心ヲ以テミルヘシ」と記されており、講義で使用されたテキストの状態を伝えている。第九十二回の講義で底本となったのは古い系統の百二十回本であると考えられるが、日本に現存しているものには、該当頁の八字目と九字目の間に隙間が開いているもの[39]や、上から八字目までの箇所を補修したことが見受けられるものがある。[40] 現存する版本が白駒が使用したものと同本であるかどうかは不明であるが、これらの状態からは白駒が使用したものにも何らかの問題があったことが推定される。同時に、この記述のある講義録は直接の受講者が書い

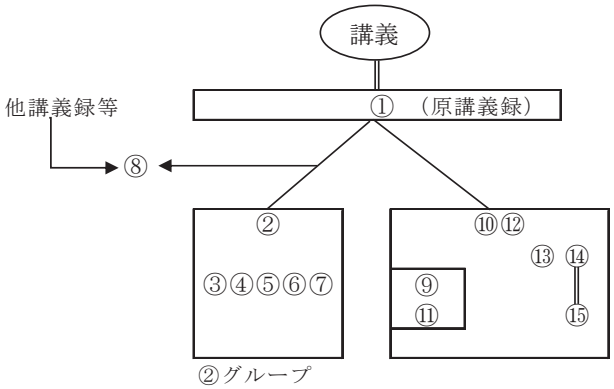
たものに近いことが疑われる。

⑩⑫は右のような特徴の他、表三にも見えるように①に大変近似した内容を持っており、原講義録かそれに近いものであることが窺われる。しかし、第二回「家生」の解説が①とはっきりと異なっていることは問題であろう。①とは別の受講者による原講義録を写したものであろうか。⑩⑫の二部と原講義録の関係については更に調査を進めたい。

⑬⑭⑮は表三でも確認されるように、似た内容を持っていることが見受けられる。また、⑬は本来⑭と同じ箇所で分かれる四冊本であったことも窺われる。現在確認、想定される綴じ方は筆記者ではなく後の所有者によっている可能性も考えられるが、②グループで共通の特徴として見られたことに鑑みれば、看過すべきではないであろう。⑮が⑭を写したものと考えられることは先に述べた通りである。

不明確な部分もあるが、十五部の『水滸伝』講義録について推測される継承関係を図示すると次のようになると思われる。

継承図



図は今回の調査の範囲で想定されるものであり、実際の成立時期ではなくあくまで本文の関係に基づいて作成したものである。先述のように、特に⑩⑫と原講義録の関係については、今後修正を要する可能性がある。

おわりに

以上『水滸伝』講義録の成立とその継承関係について論じてきた。不明確な部分は多いものの、各講義録の検討を通して成立の一面を窺い知ることが出来る。四章で示したように、講義録十五部の間には異同が散見されるが、それは筆記者、或いは後の所有者が、他で得た情報や自らの解釈を書き加えていったことによるものであると推測される。各講義録を系統付けていくことにより、近世中期以降進められてきた『水滸伝』研究の実態が、より具体的に浮かび上がるのではないだろうか。

また、現在確認出来る印記からは、江戸後期から昭和にかけて活躍した漢学者、国文学者らがこの講義録を所有していたことが推測され、白駒が享保年間に行った講義が後世に至るまで広く影響を及ぼしていた可能性が窺われる。今後は各講義録の成立後の使用にも注目し、白駒の講義を起点とした白話小説研究について追究していきたい。

注

（1）高島俊男『水滸伝と日本人』第一部第五章（筑摩書房／二〇〇六／初出『水滸伝と日本人―江戸から昭和まで』大修館書店／一九九一）。

（2）注一高島氏。

（3）『和漢語文研究』第十三号（京都府立大学国中文学会／二〇一五）。

（4）『和漢語文研究』第十四号（京都府立大学国中文学会／二〇一六）。

（5）『唐話辞書類集』第十三集（汲古書院／一九七六）。

（6）檜垣里美「岡白駒年譜」（『小説三言』所収／ゆまに書房／一九七六）。

（7）注一高島氏。

（8）拙稿『『水滸傳譯解』にみる岡白駒の『水滸傳』研究―その使用版本から』（『東方学』第百三十一輯／東方学会／二〇一六）。

（9）注八拙稿。

（10）成立は『大東急記念文庫書目』（大東急記念文庫編／一九五五）に拠って示した。

（11）徳田武「邦人漢文小説俯瞰」（新日本古典文学大系明治編三『漢文小説集』所収／岩波書店／二〇〇五）。

（12）注四拙稿。

（13）梅谷文夫・水田紀久夫『富永仲基研究』一-Ⅵ（和泉書院／一九八四）。

（14）大坂三津寺町に住む医者であり、絵及び篆刻を持って知られていたという。（石崎又造著『近世日本に於ける支那俗語文學史』第四章第三節／清水文堂書房／一九六七）

（15）『唐話辞書類集』第三集（汲古書院／一九七〇）。

（16）慶応義塾大図書館蔵本。慶応義塾大学図書館が公開しているデジタル画像によって参照した。（http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp_menu2.php?d=0019657 38）

（17）伊藤介夫については湯浅邦弘編著『増補改訂版懐徳堂事典』第四章「三、懐徳堂の交友・門人」（大阪大学出版会／二〇一六）を参照。

（18）「有不為斎文庫御蔵書入札目録」第四、二十五頁下段に「水滸傳譯解寫二冊」とある。（大阪大学付属図書館小野文庫蔵。国文学研究資料館による近代書誌・近代画像データベースに拠った。http://school.nijl.ac.jp/kindai/OSON/OSON-00321.htm）

（19）長澤規矩也『古今蔵書家印記』五十一（渡辺守邦『影印改編）古今蔵書家印記』（国文学研究資料館調査研究報告第十号／国文学研究資料館／一九八九）に「永根氏家蔵印」が掲載され、永根伍石のものであることが示されている。

（20）『国書人名辞典』第三巻（岩波書店／一九九六）

（21）石崎又造「水滸傳の異本と其の國譯本（三）」（『圖書館雑誌』第二十八年第三號／社団法人日本圖書館協會／一九三三）。

（22）廣池千九郎については、廣池千九郎記念館ホームページ「廣池千九郎について」（https://www.hiroike-chikuro.jp/aboutchikuro）、『講談社日本人名大辞典』（講談社／二〇〇一）を参照。

（23）国文学研究資料館が公開しているデジタル画像にて確認（http://base1.nijl.ac.jp/iview/Frame.jsp?DB_ID=G0003917KTM&C_CODE=0214-11403）。

（24）西尾市岩瀬文庫古典籍書誌データベースによる。（https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/2321315100）

（25）遠藤正治編『読書室２００年史』（山本読書室／一九八一）

（26）大塚秀高「写字台文庫と佐伯文庫―馬廉と澤田一齋」（『ナオ・デ・ラ・チーナ』第八号／二〇〇五）。

（27）山根泰志「中央図書館所蔵 近藤文庫について：幕末明治期漢学者旧蔵書群」（二〇〇九年に行われた九州大学附属図書館貴重文物講習会第十七回配布資料による。）

（28）『講談社日本人名大辞典』（講談社／二〇〇一）。

（29）静嘉堂文庫美術館ホームページによる。（http://www.seikado.or.jp/about/seikadoubunko.html）

（30）近世期に日本で刊行された和刻本の影印を参照した（太田辰夫・飯田吉郎編『中国秘籍叢刊』本文篇下巻／汲古書院／一九八七）。また東京大学東洋文化研究所雙紅堂文庫には別本（写本）があるが、これとは一致しない部分がある。

(31)『水滸伝』百二十回本（『李卓吾先生批點忠義水滸傳』／神山閏次氏旧蔵／東京大学文学部所蔵）を使用し確認した。

(32) 注二十一石崎氏前掲論文でもこの跋文が取り上げられている。句点は石崎氏を参考に私に付した。尚、注三拙稿でこれを「鉉敬」によるものとしたのは誤りであるので、ここで訂正させていただきます。

(33) 注十四石崎氏。

(34) 徂徠の享保年間の動向については平石直昭『荻生徂徠年譜考』（平凡社／一九八四）を参照した。

(35) 注三拙稿で白駒の講義中に見られる冠山の影響について考察している。

(36) 本文は百二十回本（注三十一。ただし四回まで欠けているため、第二回は『李卓吾先生評水滸全書』／徳山藩毛利元次旧蔵／宮内庁書陵部蔵を使用）、日本語訳は吉川幸次郎・清水茂訳『完訳水滸伝』（岩波書店／一九九八―一九九九）を参照した。

(37) 注三拙稿。

(38) 白木直也「和刻本忠義水滸傳の研究」（『水滸伝諸本の研究その四』／一九七〇）。

(39) 宮内庁書陵部蔵本二種（徳山藩毛利元次旧蔵本、高辻本）。

(40) 東京大学東洋文化研究所図書室倉石文庫蔵本。

本稿は平成二十九年度科学研究費助成事業・特別研究員奨励費・課題番号一七J〇四六九七「唐話の流行から見る漢籍受容―岡白駒とその周辺」の成果の一部である。

（二〇一七年十月二日受理）

（みやもと　はるか　本学文学研究科博士後期課程　国文学中国文学専攻）